

# 混住寮の生活では何が学ばれているのか

## —レジデント・アシスタントの語りを中心に—

吉田千春（明治大学大学院博士後期課程）

### 1. 研究の背景と目的

現在、大学のグローバル化が急速に進展し、多様な留学生の受け入れをはじめ、国際的な学びの環境作りが求められている。中でも、留学生と日本人学生が混住する混住型学生宿舎（以下、混住寮）は、留学に代わるグローバル人材を育成する場として注目を集めている（リクルートカレッジメント2013）。また、2014年度の文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」の構想調書の中にも「混住型学生宿舎の有無」を記載する欄が設けられており、生活場面で教育効果を高める寮環境が必要であるとの認識が高まるとともに、今後、混住寮が急速に増加することが予想される。

混住寮は留学生と日本人学生が共に生活する場であり、寮のコミュニティに参加する過程で、人間関係の構築、異文化衝突を乗り越える経験などを通して学生達の主体的な学びの場となりうる。しかし、学びの視点を取り入れた運営を行っている混住寮はまだ少ない。

また、異文化間教育、日本語教育における住環境に関する研究は、留学生の研究が多くを占める。居住形態が留学生の友人形成にどう影響しているかを調査した横田・田中(1992)では、一般学生寮に住む留学生が日本人との交友が最も多く、日本語力の向上にともない関係が深まることが分かっている。また、混住寮を対象とした研究には、留学生と日本人学生の対人関係構築のプロセスと問題点を明らかにした出口・八島(2008)、山川(2013)などがある。その他、ホームステイの研究は多くされており、住環境が留学生の日本語能力や対人関係構築に影響があることは実証され始めているが、混住寮の研究は数自体が少なく、留学生と日本人学生の学びや教育的意義に焦点を当てた研究はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、正統的周辺参加論（レイヴ&ウェンガー1993）を軸に、混住寮の生活における学びと意義を留学生、日本人学生ともに明らかにすることを目的とする。なお、ここで得られた知見を教室内でのカリキュラムにどうつなげるかを最終的な研究成果としていく計画である。

### 2. 研究方法

#### (1) 混住寮の調査

本発表では地方にある私立大学の混住寮 A の結果を紹介する。この混住寮 A は留学生の1年次は全員寮の居住が義務付けられており、約1300人の学生が共同生活をしている。居住者の70%が留学生（約60か国）、30%が日本人学生である。

本発表の調査対象者は3名で、属性とインタビューの実施状況は〔表1〕の通りである。この3名は全員レジデント・アシスタント（以下 RA）の経験者である。

〔表1〕調査協力者の属性とインタビューの実施状況

名前	国籍	RA 経験	言語レベル	インタビュー回数
Pさん	フィリピン	1年間	入学時の日本語レベルは中・上級	3回（1回約2時間）
Aさん	インド	1年間	入学時の日本語レベルはゼロ初級	2回（1回約2時間）
Hさん	日本	1年間	入学時の英語レベルは中・上級	2回（1回約2時間）

#### (2) 分析方法

研究対象とする寮に住む留学生と日本人学生を対象に、ライフライン・インタビュー (Life-Line Interview Method) (川島 2007) と半構造化インタビューを行った。このインタビューの録音を逐語的に起こし、文字化テキストを作成し、次の手順で分析を行った。

まず、既成概念にとらわれず、個々の学びの全体の関係性を把握するために、3名のデータを個別に KJ 法 (川喜多 1986) を用いて分析を行った。次に、KJ 法のデータを使用し、複線径路等至性アプローチ (以下、TEA) (サトウ 2009) を用いて、寮における正統的周辺参加のプロセスを分析した。正統的周辺参加論における「学び」を捉えるには、入寮から寮の十全的参加者に至るまでのプロセスや変化に着目する必要がある。そのため、時系列的なプロセスに基づいて分析を行う TEA を用いた。

### 3. 結果とまとめ

本発表では KJ 法で分析した結果を中心に発表する。

3名の分析結果から、混住寮は「多文化生活空間における多様な学びがうまれる実践の場」であり、寮では日常的に多文化を意識して、主体的に様々な人とコミュニケーションをすることで多様な実践がうまれていることが分かった。また、RAとして寮の運営に関わり、フロアの管理、寮生のケア、寮全体の管理、イベントの企画など、寮生と寮のために主体的に行動し、相手のことを考え、試行錯誤を繰り返すことで、さらに幅広い実践が生み出されており、これらの経験と行動を日々の生活において積み重ねることを通して、今までの知識と経験が結びつき、新たな学びがうまれていた。

また、学びを促進する重要な要因として、次の2つが挙げられる。1つは、「ロールモデル」の存在である。入寮初期に憧れを持った RA がロールモデルとなり、自身が RA になった際、自らも他の学生のロールモデルにならなくてはいけないという強いモチベーションがうまれていた。これが、自分の能力を超える挑戦に挑み、限界まで RA の仕事に集中する実践への原動力につながっていた。このように、RA の組織に所属し、新参者から古参者になることで、学びの機会の拡大と深化につながったと考えられる。

もう1つは「省察」である。3名は混住寮の中で常に主体的に行動しており、様々な方法で自分の行動について省察 (ショーン 2007) を行うことで、生活の中で学習のサイクルが自然に築かれていることが明らかになった。

今後は学びのプロセスがどのように生まれ、変化しているのかを TEA によって明らかにしたいと考えている。また、教室の学びが教室外の学びとどのようにつながるかを検討していくことも重要な課題になるであろう。

#### 【参考文献】

- 川島大輔 (2007) 「ライフレビュー」『質的心理学の方法—語りをさく』新曜社
- ジーン レイヴ, エティエンヌ ウェンガー(1993)『状況に埋め込まれた学習』 佐伯胖訳 産業図書
- 出口朋美・八島智子 (2008) 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』 p33-47
- ドナルド・A・ショーン (2007) 『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』 柳沢昌一・三輪建二監訳 鳳書房
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』 38,p100-115.
- 横田雅弘・田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク—居住形態 (留学生会館・寮・アパート) による比較」『学生相談研究』 13-1号, p1-8.
- リクルートカレッジメント (2013) 「特集 寮内留学」リクルートカレッジマネジメント 183, p4-32